

# 近世～近代における丸山遊郭と柳町遊郭の建築的考察

井上聖隆\*・安武敦子\*\*

## An Architectural study of the Maruyama and Yanagimachi Yukaku (a red-light districts) from the Edo to Meiji periods

by

Kiyotaka Inoue\*, Atsuko Yasutake \*\*

Among the Yukaku that were established by the political motivation in the early Edo period, the Nagasaki Maruyama Yukaku, where historical materials can be confirmed and the architectural changes with the times can be grasped, is targeted. To clarify its characteristics, we will also look at Hakata Yanagimachi Yukaku as a comparison target.

From the Edo to Meiji period, the architecture of the Maruyama Yukaku was mainly in the form of a gabled roof on the second floor. In addition, the Yanagimachi Yukaku in the Edo period was a uniform architectural design. In the Meiji era, high-rise buildings were seen in Maruyama and Yanagimachi, and the spatial structure changed.

**Key words :** *architecture of yukaku , city formation , a red-light districts*

### 1. はじめに

#### 1.1 研究目的

江戸期において幕府や藩は集娼政策により、都市周縁部に「廓」の構造を持つ公許遊郭(以下、遊郭)を計画的に設置した。代表的なものとして京都島原、江戸吉原、大阪新町があげられる。また、地方において長崎丸山、博多柳町、伏見中書島・撞木があげられる<sup>1)</sup>。これらの遊郭は都市空間において特異な存在であり、集娼方式による都市の治安維持や風俗悪化防止の政策がとられた。そしてそこで働く人々や動いている組織、さらにはそれら取り巻く産業や文化など遊郭がもたらす地域への影響は大きい。それゆえに社会史、文化史、女性史あるいは郷土史的な著述には多くの蓄積がある。代表的なものとして加藤氏の都市空間において遊郭を含む花街の立地及び、空間特性に着目したものがあげられる<sup>2)</sup>。一方で、遊郭建築や廓内の空間的特性の変遷に着目した研究は多くなく、遊郭の実態を遊郭設立から廃止にいたるまで体系的に把握することは難しい。

そこで本研究は、江戸初期に集娼政策により成立した遊郭のうち、歴史的資料が確認でき、時代による建築的な変遷が把握可能な長崎丸山遊郭(以下、丸山)を対

象とする。さらにその特徴を明らかにするために、比較対象として博多柳町遊郭(以下、柳町)を合わせて見ていく。

#### 1.2 調査方法について

遊郭建築や空間の実態を明らかにする研究として、奥富氏の研究があげられる。奥富氏は吉原遊廓を対象に歴史的資料から「幕府の都市計画と遊郭」、「街区・街路から見る町構造」、「廓内の建築」の3つの視点から吉原遊廓の空間を明らかにした<sup>3)</sup>。

本研究では丸山について株式会社花月による「花月史」<sup>注1)</sup>や赤瀬氏による「長崎丸山遊郭江戸時代のワンダーランド」<sup>注2)</sup>、柳町について井上氏による「博多風俗史」<sup>注3)</sup>などの文献をもとに歴史的整理を行う。そして空間構造や建築様式について、文献や絵図、古写真をもとに時代的な変化に着目し建築的考察を行う。

### 2. 遊郭の概要

#### 2.1 遊郭の形成

遊女・遊女屋等同業者が集住する場所として、遊郭、廓、遊里、色里、色街など様々な呼称がある。

「廓」は、堀や塀などで周囲から閉ざされた場所を示

している。江戸初期以降において散在していた遊女屋を都市周縁部の「廓」構造を持つ場所にまとめ、これを遊郭や廓と呼んだ。

一方で「廓」の構造を持たない場所は、人の往来が元々活発な場所に茶屋が建てられ次第に自然発生的に遊里化していきこれを岡場所と呼び、その存在について幕府や藩は黙認していた<sup>注4)</sup>。

## 2.2 営業形態

江戸時代において客が揚屋や茶屋に登楼し、置屋から遊女が出向く場合と客自身が遊女屋に出向き遊女を直接見立てる場合に分かれる。特に、上級遊女と遊ぶ場合は客が揚屋や茶屋には出向く必要があり、金銭的な負担が大きく優雅な遊びであった。大阪新町や京都島原など上方の遊郭は客が揚屋に登楼する形式が主流となった。一方で初期の江戸吉原も客が揚屋や茶屋に登楼する形式が主流であったが時代が下るにつれて客が遊女を直接見立てる形式が主流となった<sup>注5)</sup>。

明治以降において、遊女や遊女屋は娼妓と貸座敷に変化した。娼妓の自由意志に基づいて貸座敷業者から場所を借りる形式に変化したが発春業が廃止されることはなかった。

## 2.3 空間構造

### 1) 構成要素

遊郭は遊女屋を中心に揚屋、茶屋、仕出し屋、髪結、煮売屋、質屋など多様な業種の人々が生活していた<sup>注6)</sup>。

また、近世における遊郭は市街地と隔絶する必要があるため大門や堀、垣、川などにより出入りが制限された閉鎖的空間である。近代になると隔絶する必要性が薄れたため、囲う機能はほとんど喪失したが境界を表すモニュメントとしての役割を担った。

### 2) 街区・街路

街路は、遊郭内の共有地としての重要な構成要素であった。街路は、張見世や上級遊女が練り歩く道中など遊女稼業と街路は密接な関係であったと思われる。

街区や街路は、各地域の立地環境に合わせて変化するが、基本的に規則的な格子状街区と直線的な街路により構成されている。また、遊女や娼妓の外出管理を行う上でも規則的な格子状の街区は有効であったと思われる。

## 3. 丸山遊郭と柳町遊郭の概要

### 3.1 丸山遊郭

#### 1) 歴史

1588(文禄1)年秀吉による長崎奉行設置と同時期に博多須崎浜から遊女屋が長崎に移動する。当時、町名は町を開いた人々の出身地や人物に即して付けられ二つの「本博多町」と「今博多町」ができた。そのうち「今博多町」は芸に関わる人々が住んでいたことや遊女屋の出現により繁華街へと変化した。また、長崎開港によるポルトガル人との交流により、長崎市民の多くがキリシタンとなり、非キリシタンは遊女屋関係者や神官・僧侶ぐらいであった。

江戸期になるとキリスト教は禁教となり、遊女屋はキリシタン処刑や長崎くんちへの協力により、信奉をやめさせたい奉行所の歓心を買うことで奉行の保護による商売の安定化や権利の確保に努めた。

その後、集娼政策により1642(寛永11)年に散居していた遊女屋を丸山に集められ幕府公認の遊郭となることになった。丸山はもともと周囲を崖に囲まれていたが、造成するときにできるだけ平坦に均したため崖にかこまれた窪地となり周囲から俯瞰できた。そして丸山には寄合町と丸山町の2町をあわせた遊女町が形成され、奉行所配下の町役人が廓内のトラブル、揉め事などの仲裁に入り風紀維持に努めた。1689(元禄2)年に唐人屋敷が完成すると、それ以降異国人が長崎を自由に歩けなくなり、遊女屋の営業形態に変化が起こった。オランダ人を相手にする「出島行」と唐人を相手にする「唐人行」、日本人を相手にする「日本行」の3つに遊女が分類された<sup>注7)</sup>。出島や唐人屋敷は庶民の立ち入りが禁止であったが遊女については出入りが可能であった。揚代も出島行と唐人行は日本人行よりも高額で、異国人を好んで相手にする遊女もいた。また異国人にとって遊女は妾のような存在であり、遊女への貢物も欠かさず行い遊女の気を引こうとした。異国人の貢物は、長崎会所で換金され遊女は親しい者や遊女屋関係者などに利益を還元していた<sup>注8)</sup>。近世における丸山遊郭は異国人との交流により特殊性を際立たせたともいえる。

明治期になると、政府は人身売買を禁止したが、娼妓の自由意志を建前に従前どおり遊郭は営業していた。その後、娼妓や貸座敷の増加が見られ繁盛したと思われるが廃娼に向けた世論が強くなり、1934(昭和9)年に丸山遊郭は幕を閉じた。

## 2) 丸山における遊女屋と遊女

遊女屋では昼も夜も遊ぶことが可能であり、泊まりの場合は翌朝が期限であった。丸山大火以前は客が遊女屋で直接遊女を見立てていた。しかし、丸山大火以降は揚屋の登場により、丸山町は揚屋、寄合町は遊女屋中心の町となった。

遊女は長崎出身のものが多く、遊女の年季奉公は10年ないし禿の期間を含めると20年であり、遊女屋の抱え遊女は7～30名程度であった。また、遊女の日常生活と客の相手をする場は同一であった。遊女は踊りや三味線などの諸芸及び習字などの教養や行儀作法を習う。そして、年季明けあるいは見受された遊女は一般社会に出ても通常の主婦として扱われる<sup>7)</sup>。彼女らの存在は、貿易交渉の円滑化や異国人からの貢物など利益を生み出し長崎経済を潤した。

一方で、遊女屋当主の社会的地位は低いが遊女屋稼業については奉行所から庇護される立場でもあった<sup>注9)</sup>。

表1 丸山遊郭関連年表<sup>注10)</sup>

西暦	年号	事項
1571	元龜2	長崎の開港
1580	天正8	大村純忠、長崎6か町と茂木をイエズス会に寄進
1588	天正16	豊田秀吉、イエズス会知行所を没収し公領とする
1592	文禄1	豊田秀吉、長崎奉行を置く 博多の遊女屋が長崎に移動
1616	元和2	中国船を除く外国船の平戸、長崎以外での貿易を禁止
1634	寛永11	遊女による奉納踊りが行われる(長崎くんちの始まり)
1635	寛永12	日本人の海外渡航と帰国を禁止、外国船の入港地を長崎1港に限定
1636	寛永13	出島完成、ポルトガル人を收容し市中雜居を禁止
1641	寛永18	平戸のオランダ商館を出島に移す(鎖国体制完成)
1642	寛永19	丸山遊郭の設立
1649	慶安2	幕府は三階建建築を禁止する
1663	寛文3	長崎大火、66町中全焼57町、半焼6町(寛文の大火)
1688	元禄1	入港唐船194、史上最高記録
1689	元禄2	唐人屋敷完成
1701	元禄14	丸山大火、寄合町が丸山遊郭の中心になる
1732	享保17	享保の飢饉
1738	元文3	唐人の遊女揚代未払が問題化
1751	宝暦1	名付遊女・仕切遊女の一斉摘発
1753	宝暦3	阿蘭陀行の遊女揚代が値下げ
1759	宝暦9	名付遊女禁止令
1785	天明5	遊女揚代の見直しを懇願
1789	寛政1	隠売女の取締
1791	寛政3	貿易の定高縮小・入港船制限
1799	寛政11	丸山遊郭設立以降、遊女屋と遊女数が最も少ない
1803	享和3	旅芸子は両町遊女屋の引き受け保証を得ることを義務付ける
1817	文化14	遊女屋より芸子の取締願い
1838	天保9	遊女屋より芸子の再度取締願い
1838	天保9	長崎市中で大火事
1855	安政2	日蘭新条約によりオランダ人は行動制限が緩和
1860	万延1	稻佐郷にロシア人休息所が開設
1867	慶応3	江戸幕府の崩壊 幕府は三階建建築を許可
1868	明治1	長崎府の設置 再び名付遊女禁止令、鑑札制と買加金の導入、町芸子廃止
1872	明治5	芸妓娼妓解放令に伴い長崎娼妓規則発令
1876	明治9	貸座敷並び娼妓規則発令
1879	明治12	丸山町の大火
1909	明治42	東横番の創設(現、長崎検査)
1915	大正4	南横番の創設
1933	昭和8	張店の禁止
1934	昭和9	娼妓は酌婦とし、貸座敷業廃止(丸山遊郭の廃止)

表2 丸山町・寄合町の遊女屋・遊女数<sup>注11)</sup>

西暦	年号	遊女屋・貸座敷	遊女・娼妓数
1681	天和1	74	766
1692	元禄5	-	1443
1751-	宝暦年中	29	528
1789-	寛政年中	18	416
1842	天保13	20(+11)	496
1850	嘉永3	21	480
1894	明治15	19	221
1898	明治20	30	276
1902	明治35	39	493
1912	大正1	30	356
1925	大正14	25	343

## 3.2 柳町遊郭

## 1) 歴史

博多須崎浜の那珂川河口に遊女屋が点々と散在していたが黒田長政が福岡入城した後、城門近くに遊女屋があると体裁が悪いので移転を命じた。藩の移転命令を受け、1605(慶長10)年に移転がなされたが、遊女屋が移転にかかる費用を全て工面した。また、藩からの許可を得て新たに遊女屋を開業するものもあったが遊女屋の数は6-7軒ほどで多くはなかった<sup>注12)</sup>。

1617(元和3)年に幕府が公娼制度を公式に認めると、藩も博多柳町を官許の遊郭として認めた。藩は幕府の方針を踏襲し、私娼を抑制し遊女屋稼業を保護するとともに掟を守らせた。しかし、掟を破ることがしばしば起こると藩は1667(寛文7)年に新たな取締を発令し、遊女屋への締付けを強化するようになった。また、かねてから藩は夜間営業禁止する思惑があり、翌年に起こった柳町妓楼3軒焼失する火事を口実に夜間営業を禁止したことで柳町遊郭はさびれた。夜は午後6時から大門をしめて通行を禁止、昼はくぐり戸からひとりずつ出入りさせた。これは不審者を取調べるためでもあったが、遊郭へ出入りするものを罪人扱いしていることと同じであり客足が遠のく原因であった。しかし60年ほど経つと再び夜間営業する者や遊女の廓外出歩きなど乱れがちとなり1737(元文2)年に嚴重警告を行い、柳町に誓約書を書かせた。しばらくは夜間営業禁止を守っていたが、密かに夜間営業をするものが現れ、次第に常態化した<sup>注13)</sup>。

明治期に入ると、遊郭は発展が見られ廓が拡張されるまでに至ったが大学誘致の際近隣に遊郭が立地していると都合が悪いため1911(明治44)年に新柳町遊郭に移転する形で時代を終えた<sup>9)</sup>。

2) 柳町における遊女屋と遊女

柳町遊郭も丸山同様に遊女が日常生活をする場と客の相手をする場は同一であったが丸山遊郭と比較すると豪勢さに欠けていた。特に身の回りの調度品について、丸山遊郭はぜいたくな衣装、そして異国人からの贈り物などを持っていた。しかし、柳町遊郭の遊女は木綿着用しか認めてもらえなかった。一時期、遊女も絹ものの着用が可能であったが、しばらくすると藩の財政危機により厳しい儉約を余儀なくされ、木綿着用のみならず年2回の外出までも禁止した<sup>注14)</sup>。

また、揚代の低い設定は、家の構造や設備さらに遊女の品位がはるかに低いことを意味し、江戸期における柳町遊郭は福岡藩による執拗な取締により発展が阻害された。

表3 柳町遊郭関連年表<sup>注15)</sup>

西暦	年号	事項
1600	慶長5	黒田長政名島城に入りよく翌年福岡城構築にかかる
1605	慶長10	須崎浜に散居していた遊女屋を堅町浜に移転
1614	慶長19	女歌舞伎が流行し、柳町でもおこなう
1666	寛文6	遊女の門外出歩きにつき注意をうく
1667	寛文7	遊女30人以上の抱えを禁ぜられる 20目の礼銀を150目に増額させられる
1668	寛文8	柳町の妓楼三軒焼失、以降夜間の営業を禁止される
1736	元文1	他国のものとの縁組が停止される
1737	元文2	柳町の門限は暮6つまでと再度戒告
1740	元文5	柳町他国の娘を抱えることを許可
1743	享保3	柳町年寄の諸公役免除
1749	寛延2	武士立入禁止の柳町へ黒田藩の鉄砲組連入り込む
1751	宝暦1	柳町遊女の芝居見物禁止
1792	寛政4	博多に常住の芸者が現れる
1823	文政6	遊女の絹もの着用を許可
1842	天保13	遊女の絹もの着用を禁止、年2回の外出も禁止
1871	明治4	散髪令が出る
1872	明治5	娼妓解放令が出る 柳町に貸座敷の営業が許可
1879	明治12	柳町の検校を開始
1882	明治15	福岡県貸座敷並娼妓規則発令 柳町に娼妓のための翠糸学校開校
1888	明治21	柳町翠糸学校再開
1890	明治23	柳町全盛期に入る
1891	明治24	柳町新地を埋立て新廓を築く 芸子の営業区域が撤廃され博多芸者大いに発展
1895	明治28	柳町大火14戸焼失
1897	明治30	柳町天然痘発生
1907	明治40	柳町移転につき賛否の論争さかん
1909	明治42	柳町移転につき地主側と話し合いがつく 新柳町に一部の業者が開業
1910	明治43	旧柳町遊郭跡に大浜小学校が建つ
1911	明治44	旧柳町での貸座敷営業禁止

表4 柳町遊郭の遊女屋・遊女数<sup>注16)</sup>

西暦	年号	遊女屋・貸座敷	遊女・娼妓数
1667	寛文7	6(+1)	30
1690	元禄3	19	-
1737	元文2	9	-
1763	宝暦13	9	83
1880	明治13	18	67
1885	明治18	22	123
1890	明治23	29	252
1895	明治28	25	340
1899	明治32	37	527
1903	明治36	40	395
1910	明治43	39	500

4. 空間構造

1) 丸山遊郭

図1は丸山寄合町の廓図である。遊郭設立から廃止にいたるまで区域の大きな変化はない。しかし明治以降、門、塀の撤去や廓内の石階段を緩やかな斜面とし、遊郭としての「廓」構造がなくなり、他の町と連続した空間となった。

丸山町は東西方向にまとまりがあり、寄合町は南北方向通り沿いに細長く展開している。周囲は塀により囲われており、出入り口は船大工町と接する「二重門」と小島郷に接する「あかずの門」の二つがありいずれも夜間は閉じられた。しかし、自由な行き来が可能であったため境界としての象徴的な意味の方が大きい。小島郷は管轄が異なるため遊女屋の増築は不可能であったが、主人の別荘を建前として「茶屋」を建てた。そこでは、遊郭内で遊ぶことができない異国人や侍など接待を行った。公に遊女を呼ぶことが禁止されていたが茶屋と本家の遊女屋は裏門で自由に行き来ができた<sup>注17)</sup>。

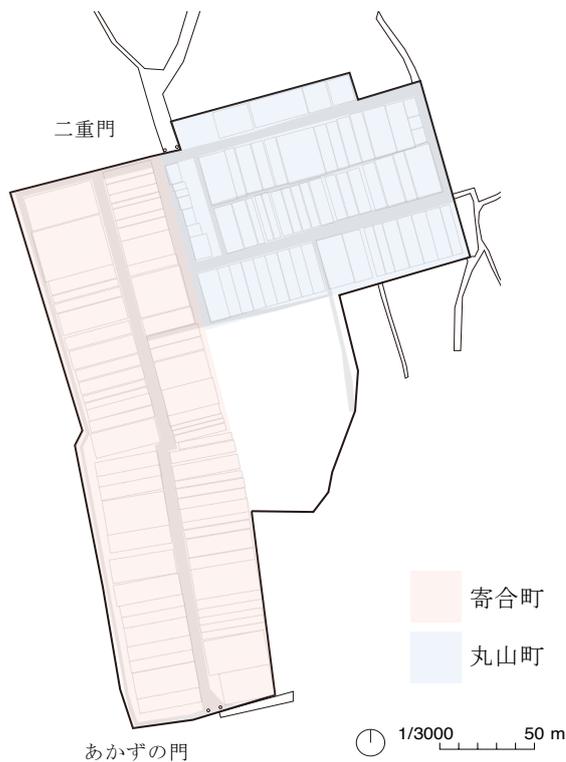


図1 明治前期の廓図<sup>注18)</sup>

2) 柳町遊郭

柳町遊郭は現在の福岡市立特別支援学校博多高等学園(旧大浜小学校)付近に立地していた。遊郭設立から

1890(明治23)年までは図2に示す廓図に大きな変化はなく、江戸期から明治初期において特に発展は見られない。その後、柳町北側の埋立て・拡張を行ったことで貸座敷・娼妓ともに増加に対応したが1911(明治44)年に廃止された。

堅町筋側に大門がありそこから石堂川(現、御笠川)の川べりまで1つの街路があり遊女屋が立ち並んでいた。石堂川沿いにも小門があったが人の出入りを制限したこともあった。

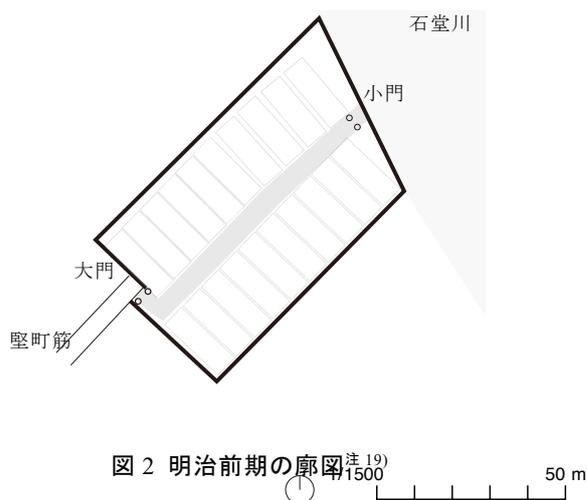


図2 明治前期の廓図<sup>注19)</sup> 1500

## 5. 遊女屋建築の様式

### 5.1 遊女屋建築意匠

建築意匠を把握できる歴史的資料を、時代順に見ていく。

#### (1)丸山遊郭

図3は丸山町を俯瞰した風俗写生画で1818(文政)年以降の作である。遊女屋の多くが厨子2階で、一部平屋も見られ、屋根は切妻型や入母家型で、建物高さは不均一である。ほとんど平入りで、通りに面した1階部分ミセは出格子や平格子、通り土間などを有している。多くの遊女屋は玄関入り口に暖簾が無く、通りと一体的につながっている。通りに面した2階部分は明障子、連子、戸袋を有しており、酒宴の様子が影で描かれている。2階建ては瓦葺き、平家は板葺が多いとされ、また棟の端部を鬼瓦、丸瓦で納めている<sup>14)</sup>。壁は目板張り、あるいは部分的に漆喰で仕上げている。

また、図左下に描かれている二重門や塀、石垣は閉鎖的空間を表している。また、廓内の階段は斜面地に立地した遊郭であることが分かる。一方で、廓内の通りに行き交う見物客や格子越しに覗く姿など見受けられる。

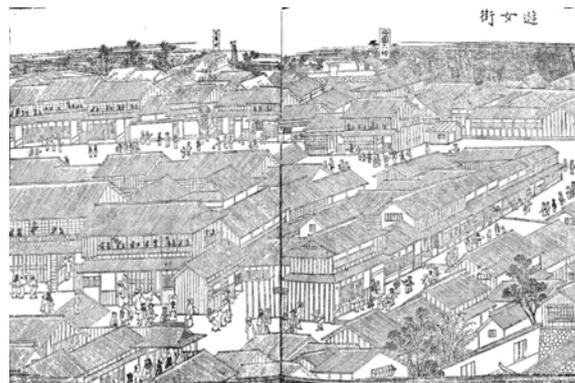


図3 『長崎名勝図絵』中の「遊女街」<sup>15)</sup>

図4は長崎港を含めた丸山町の俯瞰した風景が描かれた風俗写生画で1862(文久2)年の作である。遊女屋建築の多くが厨子2階建てで連続した町並みを形成している。通りに面した2階部分は明障子、格子窓、連子、戸袋を有しており開放的な造りとなっている。屋根は瓦葺きで切妻型や寄棟型がある。壁の多くは目板張りで一部遊女屋は2階部分を漆喰で仕上げている。全て平入りの形式で、通りに面した1階部分ミセの格子や駒寄などから距離をとって見物しており、遊女屋の玄関には暖簾がかけられている。これら暖簾や駒寄<sup>注2)</sup>は冷やかしへの対応とも言える。

二重門や地形的な隔たりが描かれており、閉鎖的空間であることを表している。一方で日本人や異国人、遊女や行商人などの姿が見受けられ、丸山遊郭は多様な人々が生活していたことを表している。



図4 「肥前長崎丸山廓中之風景絵」<sup>16)</sup>

写真1は1898～1912(明治後期)ごろに丸山町花月前の通りを撮影している。建物は総2階建てと三階建ての平入り切妻形式で屋根は瓦葺きである。1階ミセ部分は出格子があり、その前には駒寄があり、また3階建ての入口は揚げ戸・大戸である。2階部分は、連子や戸袋、明障子が見られ開放的な造りとなっている。街路は人力車のために舗装されている。

写真1 丸山町の通り<sup>注20)</sup>

写真2は1924(大正13)に寄合通りから丸山町の通りを撮影している。建物は3階建と2階建てが見え、入母家や切妻形式で屋根は瓦葺き、壁は目板張りである。1階部分は土塀、板塀、門や植栽など通りとの境界がはっきりしている。一方で、2,3階部分は、連子や戸袋、明障子が見られ開放的な造りとなっている。

写真2 丸山町の通り<sup>注21)</sup>

写真3は撮影年代不詳であるが寄合通りを撮影している。建物の多くが三階建である。入母家や切妻形式で屋根は瓦葺きで、壁は羽目板張りである。写真左側の一階ミセ部分は出格子や駒寄があるが右側の一階部分は塀、門や植栽などがある。一方で、2,3階部分は、連子や戸袋、明障子が見られ開放的な造りとなっている。

写真3 寄合町の通り<sup>注22)</sup>

## (2) 柳町遊郭

図5は元禄元(1688)年に編纂された地誌の挿絵で、柳町を俯瞰した風俗写生画で1821(文政4)年の作である。遊女屋の多くが総2階建てで建物高さは不均一に見える。通りに面した1階部分ミセは格子で片側に入口を有している。通りに面した2階部分は格子を有し、屋根は瓦葺きで切妻平入り型のみである。大門や川沿いの塀は確認できるが完全な「廓」構造を有しているかは判別が難しい。通りを行き交う人はまばらで、1階ミセ部分に遊女がいると思われるが見物客の姿はほとんど見えない。

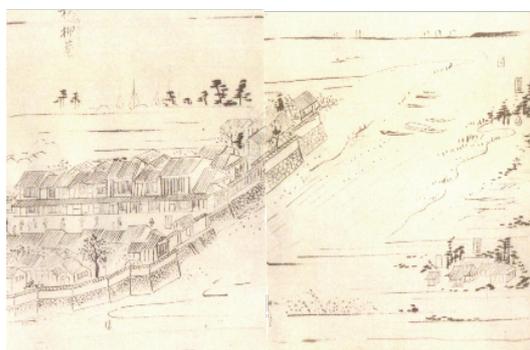
図5 筑前国続風土記中の「柳町」<sup>注23)</sup>

図6は明治20年ごろの柳町を俯瞰した風俗写生画である。遊女屋の多くが総2階建て、統一された建物高さにより連続した街並みである。通りに面した1,2階部分ミセは格子を有しており、屋根は瓦葺きで切妻型と入母家型が確認できる。川沿いの小門は常時開放していること、河岸に橋が架設されていることから比較的に出入りが自由になったと思われる。

図6 明治20年ごろの柳町ふかん図<sup>注24)</sup>

写真4は柳町遊郭の通りを写している。建物は総2階建と三階建の切妻平入り形式で屋根は瓦葺きで、壁は漆喰仕上げが目立つ。2階部分は、手すりや戸袋、明障子、軒行燈が見られ開放的な造りとなっている。



写真4 柳町遊郭古写真<sup>注25)</sup>

写真5は柳町遊郭の通りの風景を写している。建物は3階建の切妻平入り形式で屋根である。2階部分は、手すりや戸袋、明障子、軒行燈が見られ開放的な造りとなっている。また、写真右手前に塀や植栽があり、通りと空間的な隔りがある。



写真5 柳町遊郭古写真<sup>注26)</sup>

## 5.2 内部空間

両遊郭共に、遊女の日常生活と客の相手をする場が一緒であり、遊女屋は遊女の数に相当した部屋を有していたと思われる。丸山遊郭の遊女屋の造りは、博多の遊女屋を参考にしているため店の構えや商売の仕方も同じであった<sup>注27)</sup>。また、内部構造は商家の形式を参考にしており、当初能舞台を設置していたが延宝以降は消滅した<sup>18)</sup>。一方で、柳町遊郭の内部空間について暖簾をくぐると土間は裏まで続いている。土間の片方が遊女たちの溜まり場となる見世がある。また、遊女屋の構えは華美なものは許されずわずかな改造も許可が必要であった<sup>注28)</sup>。

## 6. まとめ

まず、空間構造について近世から近代にかけて丸山遊郭は比較的自由で、多様な人が行き交い生活していることが分かる。明治期に階段の撤去や門、塀の撤去により周辺と連続的な空間となり私娼の跋扈や風紀秩序の悪化が起り、娼婦の議論を生み出すなど社会的影響を与えた。近世の柳町遊郭は、藩の取締が厳しい質素な空間であったが近代になると廓外の移動が自由になった。

次に、建築様式について近世の両遊郭において多くが2階建切妻平入り形式で、壁は板張り仕上げであり、雨風が多く高温多湿な気候であるため板張りが多用されたと思われる。客は1階部分通りに面したミセで遊女を見立てた。2階の造りについて丸山遊郭は明障子や幅広い開口を有し開放的であり、近代の柳町遊郭においても同様の造りが見られた。また、丸山遊郭において本来禁止であるはずの3階建の建物や多様な建築意匠、開放的な造りなど見ることができ華やかな空間である。これは奉行所による取締は特に無く、遊郭の発展を阻害する要因がないため客の目に留まりやすい建築意匠になったと思われる。一方で、柳町遊郭の遊女屋は格子を多用しており画一的な建築意匠である。これはできるだけ藩の目につかないよう配慮されたものと思われる。

そして、近代では3階建の建築が可能となったことや娼妓や貸座敷が大幅に増えたことから両遊郭ともに3階建の建物が目立つようになった。柳町遊郭は丸山遊郭に比べ道が狭く、建物の密集度の高い。そのため防火に対する意識が高く漆喰仕上げが一部用いられたと思われる。

以上より、近世から近代を通じて丸山遊郭の建築は、風俗産業の安定的な需要から建築が華やかで客に目がつきやすく、客の遊びを刺激するといった商業的側面が重要であったと言える。しかし、3階建の建築が許されていなかったことから2階切妻平入り形式が主流であった。また、近世の柳町遊郭は常に政治的影響を受けたため社会的価値観を重要視しており、藩から目をつけられないよう画一的な建築意匠となった。

近代では丸山遊郭と同様に商業的側面を重要視するようになり建築の高層化が見られた。また、政治的要因から囲う必要がなくなり、遊郭の空間的な構造変化もおこった。

## 参考文献

- 1)北地 祐幸, 十代田 朗:江戸期以降-戦前までの地方大都市における遊里・遊郭の空間的変遷に関する研究,日本都市計画学会 都市計画論文集 No.39-3,2004
- 2)加藤政洋:花街 異空間の都市史,朝日出版社,2005
- 3)奥富小夏:廓の空間 吉原遊廓の復元的考察,日本建築学会大会学術講演便概集
- 4)加藤貴行:花月史 長崎丸山文化史,株式会社花月,2012
- 5)赤瀬浩:長崎丸山遊郭 江戸時代のワンダーランド,講談社,2021
- 6)井上精三:博多風俗史 遊里編,積文館書店, 1968
- 7)エンゲスト・ケンペル 今井正編訳:日本誌 日本の歴史と紀行 改訂・増補 新版 第5分冊,霞ヶ関出版,2001
- 8)長崎県警察本部, 長崎県警察上巻, 1976.
- 9)猪股 香織, 淵上 貴由樹, 丹羽 和彦:博多とその近傍における遊興空間の変遷と都市形成,日本建築学会研究報告 九州支部. 3, 計画系,2011
- 10)福岡県:福岡県統計書,国立国会図書館デジタルデータ収録分
- 11)丸山町図,長崎歴史文化博物館収蔵
- 12)寄合町図,長崎歴史文化博物館収蔵
- 13)奥村玉瀾:筑前名所図絵,西日本新聞社,p12,1821
- 14)野口健二:シーボルトがみた日本の近世町屋の特質-オランダへ渡った町屋模型の分析-,p63-66,2017
- 15)長崎史談会:長崎名勝図絵,長崎史談会,1931
- 16)文化遺産オンライン,肥前長崎丸山廓中之風景・肥前崎陽玉浦風景之  
図:<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/446023>(2022/6/27 閲覧)
- 17)ブライアン・パークガフニー:華の長崎—アルバム 長崎百年 秘蔵絵葉書コレクション,長崎文献社, 2005
- 18)古賀十二郎:長崎市史風俗編 上、下巻,長崎市役所,p603,1925

## 補注

- 注 1) 参考文献 4)より
- 注 2) 参考文献 5)より
- 注 3) 参考文献 6)より
- 注 4) 参考文献 4)の p.4-7 より
- 注 5) 参考文献 5)の p26-28 より
- 注 6) 参考文献 5)の p30 より
- 注 7) 参考文献 5)の p48-89 より
- 注 8) 参考文献 5)の p132-153 より
- 注 9) 参考文献 5)の p286-290 より
- 注 10) 参考文献 5)の p3-414 をもとに筆者が作成
- 注 11) 参考文献 5)の p3-414 と 8)の p1182-1183 をもとに筆者が作成。また、記載されている数に誤差があるため付記している。
- 注 12) 参考文献 8)の p343-414 より
- 注 13) 参考文献 6)の p9-10 より
- 注 14) 参考文献 6)の p23-37 より
- 注 15) 参考文献 6)の p337-345 をもとに筆者が作成
- 注 16) 参考文献 10)より明治 17 年から明治 43 年までを確認し、筆者が作成。また、記載されている数に誤差があるため付記している。
- 注 17) 参考文献 5)の p56-57 より
- 注 18) 参考文献 11)、12)をもとに筆者が作成
- 注 19) 参考文献 13)の p12 をもとに筆者が作成
- 注 20) 参考文献 17)の p82-85 より
- 注 21) 参考文献 17)の p82-85 より
- 注 22) 参考文献 17)の p82-85 より
- 注 23) 参考文献 13)の p12 より
- 注 24) 参考文献 6)の巻頭より
- 注 25) 参考文献 6)の巻頭より
- 注 26) 参考文献 6)の巻頭より
- 注 27) 参考文献 5)の p66-67 より
- 注 28) 参考文献 6)の p12 より